

明日を生きたい

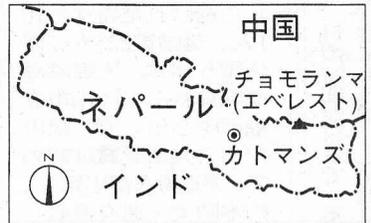
ヒマラヤのふもとから

3年前、チベット国境の村から出てきたという。両親と6人兄弟の8人家族。兄は既に働き、貧しい家庭で上から2番目のクリシュナ君に居場所はない。将来の夢？ そんなもの、ないよ。怒ったようにナイロン袋を振り回した。横に、ディネス・タパ君がいた。年は16か17歳という。「自分の年齢なんて知らないよ。親

霊峰に乳白色の雲が漂う。まだ町が眠りにふけるなか、大きなナイロン袋を背負った少年が現れた。1人、2人……その数は10人に増えた。首都・カトマンズの繁華街、タメル地区近くの道路。「1キ20ルピー（1ルピーは約2円）。この袋いっぱいで5キになるんだ。クリシュナ・チェットリ君(12)は泥だらけのTシャツに半ズボン、ゴミでうり姿だ。

街なき夢なぐつないで食ひこみ

も教えてくれなかったし。3年前、東隣のカブレ那から出てきた。手足は、棒のように細い。栄養状態がよほど悪かったのか。「夜、力の強いやつにゴミ袋を奪われた」。2週間前、食事を誘われた白人男性にホテルの部屋に連れ込まれ、同性愛を迫られて危うく逃げた。目がうつろだ。道路端のごみ捨て場では、10歳のラズ・チェットリ君が腐臭のする生ごみから換金できるプラスチックをかき分けている。西に400キ離れたスルケツト郡出身。「父さん、その2日後に母さんも病気で死んだ」。病名は知らない。「おじさんの家にいたけど、暴力をふるうんで1年前に逃げてきた」。毎日の食事が約30ルピー。蓄えはほとんど残らない。「ここは自由だし、村には居場所もないし……」。「病気になるったらどうするんだい」と聞いてみた。「分からない」。か細い声で涙ぐんだ。



早朝、町にはき出されたゴミの山から牛は食べ物をあさり、子供たちはプラスチックを集める
＝ネパール・カトマンズ市内で

ルドレンは、2万6000人。うち路上で寝ている子供は3600人で、半数がカトマンズに集中、大半がごみを拾って生活している。子供たちを預かるセンターにディネス君は帰っていません。1週間後、1カ月後にも消息をたずねたが「戻っていない」という返事が返ってきた。「病気になるたら、のたれ死にするしかないのに。病院に行っても治療費が払えないでしょう。子供たちが安心して診てもらえる病院があればいいのですが」。センターの職員は声を落とした。

文 蓮見 新也
写真 懸尾 公治

●病院建設にご協力を 「目に見える援助」を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地で進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)